

を秘めて残る。それは、食堂に張られたセメント袋の壁新聞に、肉太に記された私への攻撃文字であった。

「反動文士、葛西を祖国に帰すな」、彼は……と罪状が書かれてあったと記憶している。

当時、これはてっきりまた奥地へやられると覚悟し、つらく憤りに心が沈んだことである。しかし、幸いに二十三年七月末に生きて帰国することができた。

シベリア抑留の三年は、その後の自分の人生競争に、計りしれない損失を招いたことは否定できない。

反面にまた、ソ連に対する見方等多くの教訓と体験を得たその収穫もまた捨てがたいものであったと思う。

この意味で、私にとってシベリアは、生涯を通じて忘れ去ることのできない思い出の地である。

石切り作業の一年余

熊本県 井場 寿 春

農家の長男であった私が、満蒙の新天地に夢を抱いて故郷を出たのは、昭和十四年六月、地元の高等小学校を卒業した三か月後でした。内原にあった満蒙開拓青少年義勇軍訓練所を卒えて、大公河義勇軍開拓団に入団しました。

昭和十九年、二十歳で現地入隊、所属したのは愛媛第六国境守備隊でした。明けて昭和二十年八月九日早暁、ソ連軍の戦車部隊が続々と国境を突破して進撃する姿を目撃、機関銃で応戦したのですが、焼け石に水でした。八月二十一日、停戦の命により、愛媛から集結地の孫呉へ向かいました。ここで武装解除、九月十四日まで満州の貨物をソ連国内に輸送するための積み込み作業に汗を流しました。

作業隊は一千人に編成されて、九月十五日黒龍江を

渡り、ソ連領へ入りました。それから十月二十五日、ブレーヤ収容所に着くまでの四十日間、徒歩で歩き続けました。その間ソ連の警備兵は、途中のコルホーズで、馬鈴薯の収穫作業を手伝わせたりしました。

ブレーヤの収容所は古びたバラックだけはありませんでしたが、そのままは入れるような状態ではなく、着いたその日から屋根や壁を修理し、鉄条網を張り囲らせました。それが終わるとすぐに労働に狩り出されました。

作業は石山の石切り出し作業でした。ロシア人が爆薬によって爆破した石（花崗岩）を適当な大きさに切つて、貨車に乗せて積み出すのです。すでに雪が舞い、ただでさえ寒いのに、石は冷えきっています。作業はなかなかほかどりません。三十トン積み貨車にいっぱいになるまで班長は帰してくれないのです。

当時の食糧といえば、主食はコウリヤン飯で、メリケン粉の小玉が三つばかり入ったスープだけです。たまに塩漬けのニシンが出るくらいで、みんな寒さと栄養失調、それに労働の厳しさが加わって脱落する者が日増しにふえていきました。明けて春三月ころになる

と、三分の一くらいの隊員が死んだり、栄養失調で休養ラーゲリに送られていきました。私が辛うじて脱落を免れたのは、義勇軍にあつて労働になれていたこと、満州の冬を何年も経験して寒さにもある程度の耐久力がついていたためではなかったかと思っています。

そのころ、月に一回手紙を書くことが許されました。しかし内容は厳しく制限されており、楽しく作業に従事している、心配は何もない、といった程度のことしか書けませんでした。ひもじい、作業がつらい、など書いたはがき（往復の軍事郵便）は没収されていたようです。

石切り作業場に一年余りいて、貨車で二、三時間の後ちよつとした町へ到着しました。そこはライチハ収容所でした。たしか第十九収容所といっていたようです。

ここでの作業は炭坑で、石炭の積み出し作業班に回されました。私たち若い者だけが班をつくり、保線作業に当たることになりました。トロツコを通す新しいレールを敷いたり、線路を修理したりする作業です。

技術者の班ということでノルマはよく、ここでは黒パンも六百グラムほどの大きなものをもらいました。収容所の一角にバザールがあり、二〇〇%の作業ノルマをあげると現金が支給され、バザールでたばこや甘味品を買うことができました。

一九四六年の後半から民主運動が始まりました。若い元気な者が選抜されて、共産党の勉強をするためにハバロフスクに派遣されました。彼らが帰ってくると共産党の歴史を学ばせられ、作業の後は収容所の庭でインターナショナルの歌を歌わせられました。アクチブたちは、作業ノルマを上げ、民主運動をより早くマスタートした班からダモイだと叫びました。班員たちは一日も早く帰国するために、疲れた体にむち打って共産党史の勉強に励んでいたのです。

そのころから、全体的に給与がよくなったと思います。収容所内に文化部が結成され、音楽や歌を聞かされるようになったのもこのころではなかったかと思えます。

昭和二十三年八月中旬、ぼくたちの班から優秀労働

者がダモイということで、ライチハの駅からナホトカへ向かいました。すでに引揚船は港に入っていました。が、ここで使役のために何人か残るように言われました。だれも申し出る者がいません。私は進んで残ることを申し出ました。一週間、パン工場からメリケン粉を運ぶ作業につきました。幸い次の引揚船が入港したので、私は一週間おくれで舞鶴に上陸することができたのです。

ブレーヤ収容所での石切り作業のつらさは、今でも忘れることができません。しかしそのときのつらさが、その後の私の生き方を支えてくれたのも、事実でしょう。

炭坑に明け暮れた抑留の思い出

岩手県 盛川 松雄

私たち終戦を知ったのは二十年の八月の二十八日です。それ以降、興安まで行ったのが三日ほどかかって、